

道徳

「法を守る心」

**1** ねらい  
法やきまりの意義を理解し、遵守するとともに、社会の秩序と規律を高めるように努めようとする心情を育てる。

**2** 「法」に関する教育において育てたい児童・生徒像との関連  
 <「法」に対する興味・関心>  
 ・法やきまりを身近なものに感じ、興味・関心をもつ。  
 <「法」に対する知識・理解>  
 ・日常生活の中の何気ない行為が法と関連があることを知るとともに、社会の秩序を維持するために法があることを理解する。  
 <「法」に基づき社会の形成に参画する態度>  
 ・自由で公正な社会の担い手として、法を遵守しながら社会の秩序と規律を高めるように努めようとする。

**3** 「法」に関する教育とかわりのある主な指導内容との関連  
 本主題は、中学校学習指導要領道徳の内容4－(1)「法やきまりの意義を理解し、遵守するとともに、自他の権利を重んじ義務を確実に果たして、社会の秩序と規律を高めるように努める。」との関連を図って設定している。

**4** 本時の展開  
 ※資料名：「傘の下」【出典】平成9年文部省「中学校 社会のルールを大切にする心を育てる」

過程	主な発問と予想される生徒の反応	主な指導上の留意点 (★「法」に関する教育と関連があるもの)
導入	<p><b>1</b> 身近な生活にあるきまりを想起する。</p> <p>①他人の物を、自分の都合で「後で話すから、ちょっと借りる」という行為は、犯罪になると思いますか。                      ・借りるだけだから、犯罪にはならない。                      ・黙って持ち去るのは、横領罪と同じだから犯罪だ。</p>	<p>★専門家の支援として、法律実務家を教室に招く。生徒に紹介後、犯罪に「なる」「ならない」は明示せず、生徒の発言を受け止めるようにする。</p>
展開1	<p><b>2</b> 資料を読んで話し合う。</p> <p>②止みそうにない雨を見て、傘立ての傘に気付いた僕は、どんな気持ちだったのでしょうか。                      ・どうせ、置き忘れだから、後で返せばいい。                      ・だれにも知らなければ勝手に使ってもかまわない。</p> <p>③雨の中、自分を追い越していく女性の姿が頭を離れなかったのは、僕がどんなことを考えていたからでしょう。                      ・あの人微笑んだのは、僕が傘を勝手に借りたことを見通しているからだ。                      ・後ろめたいなあ。雨に濡れなくても、気持ちが悪いなあ。</p> <p>④自分がそしらぬ顔で返した紺色の傘を手に帰って行く女性の姿を見た僕は、どんなことを考えていたでしょう。                      ・彼女の傘だったのか。僕のことを見逃して、自分は濡れて帰った。人の物を勝手に使った自分が恥ずかしい。</p>	<p>○資料は教師が範読する。</p> <p>★置き忘れ傘であっても、勝手に使ってはいけないことは、生徒は知っているので、利己的に解釈して使ってしまった主人公の心情について十分に共感できるようにする。</p> <p>★自分さえよければいいという考え方に恥じ入る主人公の気持ちに共感できるようにする。</p> <p>○④の発問については、ワークシートを活用し、じっくりと考えられるようにする。</p>
展開2	<p><b>3</b> 法を守ることにについて、自分を振り返る。</p> <p>⑤他人の傘や自転車を許可なく使うことは、法を犯す行為であることを改めて知り、自分自身が法を守って生きるためには、どんなことが大切か話し合う。                      ・自分に都合がよいことでも、法を破れば犯罪となる。                      ・社会の秩序を守るためにも法は必要である。</p>	<p>★法律実務家から窃盗罪や横領罪について説明してもらう。</p> <p>★社会における法の意義を考えるようにするとともに、社会の一員として、法を遵守して生きることの大切さに共感できるようにする。</p>
終末	<p><b>4</b> 教師の説話を聞く。</p> <p>【例】「法やきまりは、自分たちの生活や権利を守るためにある」と、実感した教師の体験について語る。</p>	

□評価：僕の気持ちをじっくりと考えることを通して、法やきまりの意義を理解し、遵守するとともに、社会の秩序と規律を高めるように努めようとする心情が高まったか。

傘の下

行き交う人々は、冷たい時雨にコートの衿を立て足早に家路を急ぐ。冷たい雨が降り始めるこの季節になると、僕は、きまつて思い出すことがある。

忘れもしない中学三年生の時のことである。僕にとつて、それは苦い思い出であると同時に、多くのことを教えてくれた一つの出来事だった。

(ああ、しまった、降っている。やっぱりお母さんが言ったとおり、傘を持ってくるんだった。)

朝、母と言い争ったあと、結局傘を持たずに出かけてきてしまったことが悔やまれる。すっかり暗くなった街、ネオンサインの反射がもうかなり前から降り出したらしい雨の通りを映し出している。美術部での活動を終わって病院に駆け込んだのが、外来の受付終了時間の少し前だったから、もうかれこれ四十分ほど過ぎようとしている。僕は、受け付けカウンターのすぐ上にかかっている時計を見上げながら途方にくれた。先週から耳と鼻の調子が悪く、養護の先生に中耳炎の疑いがあると言われ、この病院の耳鼻科に通院を始めたのだった。さつき薬を吸入した鼻の奥が少し痛む。それに、頭も何となく重たい感じがする。

(ついでないなあ。外は寒そうだし、こんな中、傘もささずに歩いて帰ったら風邪を引いちまうよ。来週からは、期末テストだっていうのに、まいったなあ。)

中間テストが悪かっただけに、今日は何としてでも早く帰って机に向かおうと考えていたのだった。

雨は止みそうもない。それどころかさつきよりいつそう雨足が強くなっているような気がする。

治療を終えて帰ろうとしたとき、入り口のそばにある、作り付けの傘立てが僕を釘付けにした。何本もの傘が立っている。それは、僕にとつてまったくくうらめしい光景だった。と、その時、数日前の晴れた日のことを思い出した。置き忘れられたらしい教本の傘が放置してあったのだ。

幸いさつきからこの玄関の人の出入りが少ない。そう思うと傘立てに近付いた僕は、とつさに、自分の傘を探しているかのように振る舞った。数秒後には、一番奥の枠に立てられていた紺色の傘の柄を手にしていた。

目立たないこの傘は、その時の僕にふさわしいような気さえした。

「お疲れさま。」弾んだ若い女性の声に、僕はじきつとした。

病院で働いている人だろうか。誰かと挨拶を交わしてこつちへやって来る。あわてて僕は表に飛び出したが、何事もなかったかのように呼吸を整え、わざとゆっくり歩き出した。後ろの気配をうかがいながらも平気な顔を装っている、濡れた道を駆けて来る足音がする。思わず振り向いた僕とその足音の主は、一瞬目が合ってしまった。あつという間に僕を追い越して駆けていく。さつき思わず目を反らしたが、心なしか僕の方を見て、微笑んでいたような気がする。コートの衿を立て傘もささずに駆けていく姿。きつちりと後ろでまとめた長い髪が左右に揺れ、雨に濡れている。ハイヒールの足音がだんだん遠ざかっていく。さつきの人だったのだろうか。雨の中を走って行った彼女の姿がなぜかいつまでも頭を離れないまま、僕はJR線の駅に向かって急いだ。

水曜日、僕は三日間の期末テストを無事に終え、久しぶりの開放感を味わいながら耳鼻科に急いだ。耳と鼻は相変わらず調子が悪い。先週のあの雨の日から五日間も経っている。次の日、すぐに傘を返しに行こうと思いつきながら、ずつと晴れた日が続いていたこともあって返しそびれていたのだ。おかげでテスト勉強の方は、時間を無駄にせずできたように思う。晴れているのに傘を持って人通りを歩くのは、何だかきまり悪いが返さないわけにはいかない。あの日は、おかげで雨に濡れずにすんだし、勉強だってはかどった。

病院の玄関に入って、真っ先にあの目立たない紺色の傘をもとの場所に返した。この前と同じように教本の傘が置き去りになっていた。紺色の傘も、ずつと前からその場所に置いてあったように見える。何となく僕は、ほつとした気持ちになった。

耳鼻科でいつもの治療を終えて、受付の前さしかかった。その横のドアが開いて、「お疲れさま。」弾むような声、聞き覚えのある声。

僕の顔をコートの衿を立て、歩いて行くハイヒールの女性がいる。間違いないあの雨の日のあの人…。僕は、後ろについていく恰好になった。

彼女は玄関に向かい外に出ようとしたが、何を思ったかふと傘立てに目をとめて立ち止まった。そこで一本の傘を手にしたのだ。まぎれもない、それはあの紺色の傘だった。

そして、傘の柄を持ってその場でくると一回転させると、玄関の重たいガラスの扉を押して外に出て行った。軽やかな足取りに合わせるように、後ろでまとめた長い髪が揺れていた。

僕は自分の目を疑った。

濡れながら駆けて行ったあの人の姿が、通りの向こうで重なっていく。

【出典】平成九年三月文部省「中学校 社会のルールを大切にすることを育てる」

道徳

「法やきまりを守る心」

- 1 **ねらい**  
法やきまりの意義を理解し、遵守するとともに、社会の秩序と規律を高めるように努めようとする心情を育てる。
- 2 **「法」に関する教育において育てたい児童・生徒像との関連**  
 <「法」に対する興味・関心>  
 ・法やきまり、ルールを身近なものに感じ、興味・関心をもつ。  
 <「法」に対する知識・理解>  
 ・自分の勝手な都合で法やきまりを破ることは、時には他者を傷付ける事態を招く場合があることを知り、互いを尊重し社会の秩序を維持するために法やきまりがあることを理解する。  
 <「法」に基づき社会の形成に参画する態度>  
 ・自由で公正な社会の担い手として、法を遵守しながら社会の秩序と規律を高めようとする。
- 3 **「法」に関する教育とかかわりのある主な指導内容との関連**  
 本主題は、中学校学習指導要領道徳の内容4－(1)「法やきまりの意義を理解し、遵守するとともに、自他の権利を重んじ義務を確実に果たして、社会の秩序と規律を高めるように努める。」との関連を図って設定している。
- 4 **本時の展開**  
 ※資料名：「郵便局でのできごと」  
 【出典】平成9年文部省「中学校 社会のルールを大切に作る心育てる」

過程	主な発問と予想される生徒の反応	指導上の留意点 (★「法」に関する教育と関連があるもの)
導入	<b>1</b> 身近な生活にあるきまりを想起する。 ①自分にとって都合の悪いきまりやルールは、「ちょっとぐらい守らなくてもいいじゃないか」と、相手に大目に見てほしいと思った体験がありますか。 ・体調が悪かったため、電車に乗る際、横入りした。	○「価値への導入」として、生徒の体験を質問するが、挙手がない場合は無理に発言を求めないで、自分の内面をじっくりと振り返るように助言する。
展開1	<b>2</b> 資料を読んで話し合う。 ②小包が手に入らず、ブスツとして不機嫌な表情になった知香はどんな気持ちだったでしょう。 ・大目に見てくれてもいいのに。・サービスが悪いなあ。 ③「けがをさせた訳ではないし」と自分に言い訳しながらペダルを踏み込む知香は、どんなことを考えていたでしょう。 ・本当は自分が悪かった。あの男の子をはねずに、本当によかった。 ・交通ルールも郵便局の規則もどちらもきまりなんだ。 ④「みんなが規則に守られて生活している」と気付いた知香は、どんなことを考えていたでしょう。 ・自分本位の行動で、規則を破ってはならない。 ・自分の権利を守るために、義務も果たさなければ、よりよい生活、よりよい社会を実現することはできない。	○資料は教師が範読する。 ★印鑑と不在配達通知を忘れた自分を棚に上げて憤る知香の身勝手さに、十分に共感することで、「きまり」について関心がもてるようにする。 ★交通ルールも郵便局の規則も、守るべききまりであり、それぞれの規則の意義と役割を十分に考えるようにする。 ○④の発問については、ワークシートを活用し、じっくりと考えるようにする。
展開2	<b>3</b> 法を守ることについて、自分を振り返る。 ⑤法や社会のきまりについて、自分は普段、どのように感じているか、自分を振り返ってみましょう。 ・自分に都合よく考え、行動してしまうことがある。急いでいるときなど交通ルールを守れないこともある。 ・法を意識して生活していないことに今日気が付いた。当り前に生活していく中で、ルールを無意識に守っている。これからも守って生活したい。	○隣の席の生徒とペアになり、意見を交換し合うことで、自分の考えを深めるようにする。 ★「法律」「規則」「その場所でのルール」「マナー」など、様々な観点で考えるとされるが、自己とのかかわりの中で考えられていれば、いずれも認めるようにする。
終末	<b>4</b> 教師の説話を聞く。 ※きまりを守ることについて、「天知る、地知る、子知る、我知る」(四知『後漢書楊震伝』)を用いて短時間でまとめる。	

□評価：知香の気持ちをじっくりと考えることを通して、法やきまりの意義を理解し、遵守するとともに、社会の秩序と規律を高めるように努めようとする心情が高まったか。

## 郵便局のできごと

「知香、学校から帰ったら小包をもらってきてちょうだい。」

と今朝、母から用事を頼まれた私は、自転車で十分ほど走り、郵便局の駐輪場に着いた。母から預かったはがき(不在配達)の通知書と印鑑などをだそうと、ポケットに手を入れてみたがない。

「どうしてないのかなあ。あ、そうだ、犬小屋だ。」

さつき、家を出ようとしたときポチが飛びついてきたので、つい遊んでしまい犬小屋の横に印鑑などを置いたまま、あわてて家をとび出してしまったからだ。今から家に引き返したとしても窓口は閉まってしまいかもしれない。困ってしまった知香はあきらめて家に帰ろうかと思つてはみたものの小包を送ってくれた方の心づかいや、用事を引き受けた手前、引っ込みがつかないという思いも重なり、帰れなくなつてしまった。

(確か、この郵便局にはバスケット部と同じポジションを守っている友達のお姉さんが勤めているはずだし、少しぐらいなんとかなるかもしれない。)

と、そんな気持ちになつた私は窓口をのぞいて見た。しかし、お姉さんの姿はなく窓口には見知らぬ男の人がいるだけだ。とにかく私は、その人に聞いてみることにした。

「あ、う、はがき(不在配達)の通知書を忘れてきたんですが、小包をもらうわけにはい

きませんか。」

「印鑑の方はありますか。」

と窓口の人は聞き返した。

「それもないんです。みんな犬小屋に置いてきちやつたんです。」

と言つて私はいつまんで事情を話してみた。

「残念だけれど、規則だから渡す訳にはいかないなあ。その住所なら家に戻つても、まだ間に合うよ。取つてきておいで。」

と窓口の人は住所などを私に確かめながら言った。

(お姉さんがいてくれたらなあ。)

そう思うと、ついブスツとしてしまい不機嫌な表情を顔に表した。しかし、私は郵便局を後にするしかなかった。

家に戻り、忘れ物をポケットに押し込むと再び自転車にまたがる。ペダルを踏みながら、きまりつて、そんなに冷たいものなのかなあ、人が暮らしやすいようにあるのではないだろうか、などと自問自答を繰り返していた。時計の針はすでに四時四十五分を指している。

「後、十五分、急がなくなっちゃ。」

信号のない近道を考え、裏通りの方から行くことにした。焦りから自然とペダルを踏み力が強まり、自転車のスピードは、つい上がりがちで、四つ角を通り過ぎる度に、こまめに一時停止するのが面倒くさくなつていった。

(車も来ないし、まあいいや、行っちゃおう。)

と考えた私は、自転車のスピードを少し落とすだけで、四つ角を通り過ぎようとした。

「あつ、危ない。」と、とつさに周りの人が口々に叫んだ。知香の自転車が角を渡ろうとした小さな男の子をはねそうになった。びっくりして立ち止まった男の子を危うくよけて自転車は止まった。危機一髪、男の子は無事だった。

「危ないじゃないのよ。」

と私は思わず言った。

「心配なさそうだよ。」大丈夫だよ。さあ、気を付けてお行き。」

と小さな男の子は周りの人から、次々に声をかけてもらい気を取り戻したかのように小走りにかげ去つた。

「ここは、止まってくれなくちゃ。」そうよ、一時停止しなきゃいけない場所だものね。」

「これじゃ、危なくてしょうがないわ。」

そんな会話が私の耳に入ってきたが、時間のない私はとにかく郵便局へ向かうしかなかった。その会話の一言一言を振り払うかのようにペダルを踏み込むと、額にうっすらと汗が浮かんできた。(急いでいたんだ。それにけがをさせた訳ではないし。)

ふと、そんな考えが浮かんで消えていく。その内、会話の一言一言が次第にはつきりと、しかも大きくなり、耳にこびり付いて離れなくなる。すると何ともいえない感じが知香の心の中に渦巻き気持ちは重く沈み込んでいった。

とにかく窓口が閉まってしまったら、急いで家に取りに戻つたことが水の泡になる。やつと郵便局にたどり着くと、窓口はちょうど閉められようとするところだった。

「知香ちゃん、何のご用なの。」

と窓口からお姉さんが声を掛けてくれた。

「母の用事で小包を取りに来たんです。」

と息をはずませながら知香は言った。

「そう、ご苦労様。それじゃ、不在配達)の通知書と印鑑をお願いします。」

「はい、これです。」

と、はがき(不在配達)の通知書と印鑑を胸を張つて気持ちよく差し出した知香は、先ほどの窓口でのことを思い出していた。今の自分と、お姉さんがいないかと窓口をのぞいて見たときや、窓口の方についてブスツとしてしまったときの自分とは、随分と違っているような気がしてきてきた。

「どう、バスケット部、楽しくやっているの。はい、お疲れさま。」

と、お姉さんは事務処理をテキパキ済ませると、小包を渡してくれた。あて名は、間違はなく父の氏名だった。私はやつと父あての小包を手にするこができたのである。

自転車のペダルを踏み家路についた私は、四つ角での小さな男の子も私も実はみんなが、規則に守られて生活しているような気がしてきていた。そう思うと、四つ角で味わった重たく沈み込んだ気分が少し楽になり、背筋が少し伸びてきた。

夕暮れどき、川面から吹き上げる冷たい風は頬に心地よかった。

【出典】平成九年三月文部省「中学校 社会のルールを大切にすることを育てる」